

非文字資料研究センター 新刊のご紹介

非文字資料研究 24 号



●2022 年 3 月 20 日刊行

●内容

モデルネからアヴァンギャルドへ

——カバレット「11 人の死刑執行人」と若者たちの企て——

小松原由理

近代沖縄神社神道史における御嶽・拝所の神社化の背景

前田孝和

再建と再会：学術用語「民具」の中国民俗学界への紹介をめぐる

余瑋

表象としての鳥居

——ブラジル・サンパウロを事例に——

加藤里織

現代ブラジル日果樹園の作物栽培における知識の獲得と技術共有

吉村竜

広東神社考

鍾剣峰

訳 成田紅音

編集後記

長引くコロナ禍に加え、戻り梅雨、記録的な猛暑、立て続けの台風来襲と、激しい気象変化に翻弄されながら、今年も折り返しの時期を迎えました。一方で、最近は公私にわたるさまざまな場面で「3 年ぶりの対面」の声を耳にするようにもなりました。長いトンネルの先から、爽やかな秋風とともにようやく光が差ししてきたかのようです。

新年度から対面授業が基本となり、オンラインのみでの開催を余儀なくされてきた本センターの研究会も、対面とオンラインの併用という、コロナ禍で得たスキルを活かした新たなスタイルが定着してきました。調査のため現地に足を運ぶ機会も徐々に増え、今号では、新たに掘り起こされた資料やそこから得られた知見など、各班が模索を重ねながら取り組んできた研究成果を報告しています。従来の研究班のみならず、新規に発足した 3 つの準備班も、それぞれ研究会や現地調査をスタートさせました。それらの成果も、今後の News Letter で随時紹介していきます。

そして今年度は、第 5 期共同研究の最終年度という節目の年でもあります。21 世紀 COE プログラムから数えて約 20 年にわたる本センターの活動を振り返りつつ、次のステップへと進むための大切な半年となりそうです。(山本志乃)

表紙紹介

表紙の絵葉書は鶴岡商店発行の「(樺太風景) 大泊榮町大通り」である。かつて、北海道の北に樺太と呼ばれた日本の植民地が存在していた、また、そこに大泊という港町があったことを現在どのくらいの人々が知っているだろうか。恐らく知らない人が多いと思う。戦後 77 年を経て知る世代が少なくなってきた今だからこそ、樺太の社会を伝える意味でこの 1 枚を選んだ。

本文でも触れたが改めて解説をしたい。大泊は樺太庁が置かれた豊原の南に位置する。また、漁場でもある亜庭湾に面して、樺太と北海道・本州間を結ぶ北日本汽船や対岸の北海道・稚内で鉄道と接続する稚泊連絡船などの発着地であった。そのため移住者や漁業・林業に従事する出稼ぎ労働者、旅行者が大泊に降り立った。大泊港に近い飲食店や旅館は樺太に出入りする人で大変賑わいを見せた。そのひとつが榮町であった。大泊は樺太の玄関口の役割を担っていた。

絵葉書の風景は、当時の「内地」と変わらない街並みといえる。絵葉書の街並みや人々の服装からは植民地であると理解できない構図となっている。これが樺太の絵葉書の見せ方のひとつかもしれない。

本稿執筆後、資料紹介した絵葉書が本文の年代よりもう少し遡る可能性があることを『樺太日日新聞』の記事から見つけた。非文字資料の角度からも研究を深めていきたい。(松山紘章)

『非文字資料研究』への寄稿について

人類文化の研究は、人間それ自身と人間が織り成す社会を研究することを目的とするが、その研究は文字で表現された資料を主な対象として行われてきた。しかし、人間の活動とその結果生み出されるものは、文字で記録されたものに止まらない。絵画・写真・映画・建築・民具・音声などの形で記録されたり、地形や景観あるいは人間の身体それ自身に刻み込まれたりもする。さらに、匂い・しぐさ・味覚・感触など「記録化」することが難しいものも、人類文化を構成する大事な要素である。

非文字資料研究センターは、そのような文字以外の記録及び文字では表現されにくい人間の諸活動を「非文字資料」として体系化し、それを研究する新しい方法を開発し、より包括的な人間と文化の理解にいたることを目指している。21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2003－2007年度）以来、わたしどもは、その目的を達成するために＜図像＞＜身体技法＞＜環境・景観＞のなかから研究課題を絞り込み、共同研究を展開してきた。この共同研究は、歴史学・民俗学はもとより、文化人類学、比較文化論、美術史、建築史、災害史、情報科学などを専門とする内外の研究者によって支えられてきた。

このように多様な学問的広がりをもつ非文字資料は、世界各国の地域文化の諸相を具体的かつ可視的に示す絶好の資料であるとともに、資料自体が多層的な時代・地域において蓄積されてきた背景をもっているため、研究方法としても比較歴史的な視点を求めるものであり、ひいては、人類文化研究の総合的・学際的な発展の可能性を有している。

しかし、研究資料の分析指標の設定、意味の解釈という困難な作業には、研究概念と成果の普遍性が求められる。また世界共通の標準的・普遍的な研究資料の資料化・体系化を行うには、世界各地の関連学問分野の研究者による相互検証が不可欠である。本センターの研究活動においても、関係研究者との共同作業を必要としている。

『非文字資料研究』は、世界の各地域において活躍されている非文字資料研究者からの寄稿を歓迎し、本誌が多分野にわたる研究者相互の学問的遭遇の場として発展するとともに、人類文化の豊かな研究に寄与することを期待する。

寄稿をご希望の方は、当センターのホームページをご覧ください、執筆要項等の詳細をご確認ください。

エントリー募集期間：前期 1月～3月 後期 7月～9月

原稿締め切り：前期 3月末 後期 9月末

※原稿ご提出後、査読があります。

エントリー用紙：当センターのホームページよりダウンロードしてください。

執筆要項：当センターのホームページよりご確認ください。

表記・書式細目：当センターのホームページよりご確認ください。

エントリーシートの提出・お問い合わせ先：非文字資料研究センター

E-mail: himoji-info@kanagawa-u.ac.jp

ホームページ: <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

非文字資料研究センター News Letter No.48

発行日 2022年9月30日発行

編集・発行 神奈川大学 非文字資料研究センター
日本常民文化研究所

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

